

## 新製品開発におけるフロント・エンド・ローディング ‘製品価値の Slump と発想の転換’

— 2030 年の技術 —

(株)ジヨンケルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in New Product Development

‘Slump of product value and conversion of ideas’

-Technology of 2030-

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

### **Keywords: 品質保証・問題・クローズアップ・設計基準・発想の転換・強調**

2017年は、我が国を揺るがす品質保証の問題がクローズアップされた年と言っても良いかもしれません。自動車部品となる素材から始まり、無資格検査員の横行といった一連の騒動は、日本の活力の根本を覆す大きな出来事であると言っても過言ではないかもしれません。

この背景に潜むものは、どこにあるのだろうかという素朴な疑問に立ち返りますと、製品開発の基本と共通した「何か」があるのではないかと、一抹の不安がよぎります。ここ数十年の製品開発の歴史をとくと振り返り、なぜ日本製品は世界に羽ばたいたのだろうか、あるいは品質はどのようにして確保できたのであろうかなど、その足跡を辿ったところで何の解決にもつながらないでしょう。簡単にいえば、昔は欲しいものを提供できれば、それが売れる製品となり、大量生産によって大きな利益をもたらしたと言いきれるかもしれません。その過程で、七転八倒しながら品質保証を充実させたことによって、“品質 is No.1”という称号を世界から得ることができたともいえます。しかしながら、現代の状況はどうでしょうか。独占的市場は開放され、競合他社が乱立し、ありとあらゆる製品が溢れかえり、製品価値と価格の乖離が進み、いわば、“製品価値のSlump”を引起しているのではないかと考えても不思議ではないでしょう。

こうしたことに鑑みますと、製品開発の設計基準に光を当て見直す機運を高めることもひとつの解決方法を導き出してくれるかもしれません。これは、ほんの一例ですが、ある電気メーカーでのコンサルティングの経験を通して見た場合、同一製品の中で30万円の製品、10万円の製品、5万円の製品も同じ設計基準を踏襲しています。もちろん、どこの企業でも出荷時には公的な基準に加え企業特有の基準をカバーしなければならないことは周知の通りです。また、設計基準の中には、大なり小なりDR（デザインレビュー）とtr（テクニカルレビュー）が含まれています。これらのDRとtrが曲者で、先ほども述べましたように、同一製品の中で大きな価格差があってもひとつの設計基準を利用して審査を行っているわけです。したがって、同一製品の中で金額の高いものは、それなりの時間をかけることができるでしょうが、安いものに同じような時間をかけることができないはずで、このように、少し高圧的に申し上げますと、製品開発のプロを自負している方からは、高いも安いも手を抜くことはできないというようなお叱りの言葉が聞こえるようです。しかしながら、市場が大きく変貌している現状を目の当たりにして、まだ、そのようなお題目を唱えるのでしょうか。今後は、さらに働き方も加速して変わるでしょう。製品単価が高いものには力を入れ、安いものは力を抜けばいいということではなく、それぞれの製品開発に照合した設計基準なり開発基準を作り上げるという、いわば発想の転換が必要ではないか、これを特に強調したいと思います。言い換えますと、設計基準・審査基準の元年と言いつけ、新たな展開に行動を起こすことが肝要だと思います。

今年も師走に入り、年末に向けて忙しい日々が続くと思いますが、どうぞお身体をご自愛ください。

2018年は、新たな気持ちでJQ International Reviewを書き下していきたいと思っております。